

特集 学生の研究活動報告—国内学会大会・国際会議参加記 29

ASEAN グローバルプログラム に参加して

永井沙季
Saki NAGAI

環境ソリューション工学科 2年

1. はじめに

2018年8月28日から9月6日にかけて、ASEAN グローバルプログラムに参加し、ベトナムとシンガポールを訪問した。このプログラムでは、企業訪問や大学見学、ハノイ工業大学の学生とPBL等を行った。具体的なプログラムの日程を表1に示す。

表1 プログラムの日程

| | |
|----------|-----------------------------------|
| 8月28日(火) | 出国、オリエンテーション |
| 8月29日(水) | 企業訪問(栄光堂、RikkeiSoft/NTQ) |
| 8月30日(木) | ハノイ工業大学でPBL(調査) |
| 8月31日(金) | ハノイ工業大学でPBL(調査&発表) |
| 9月1日(土) | ベトナム観光 |
| 9月2日(日) | シンガポール着 WASABIで講演会 |
| 9月3日(月) | 南洋理工大学訪問 |
| 9月4日(火) | Googleで講演会 ビジネスパーソン交流会 加藤さん講演会 |
| 9月5日(水) | シンガポール観光 |
| 9月6日(木) | 帰国 |

2. 参加目的

私がこのプログラムに参加した目的は、自分の視野を広げるためであった。日本では海外の方と関わる機会があまりなく、海外に行ったのもほとんど記憶の無い幼少期の一度きりであった。このプログラムでは、ハノイ工業大学の学生とのPBLがあったり、現地の企業に訪問したりと海外の方と関わる機会が多くあり、様々な価値観に触れられるのではないかと期待して応募した。

また、ASEAN地域は、進出している日本の企業が多くあるなど日本とのつながりが大きいですが、自分はこの国々についてよく知らないなと感じていた。

そのためこのプログラムを機会に、実際自分の目で見てASEAN地域の文化や特徴を知りたいと考えた。

3. 研修内容

ここではいくつかのプログラムの中で、特に印象に残った南洋理工大学でのプログラムと加藤氏の講演について詳しく述べる。

3.1 南洋理工大学

9月3日に南洋理工大学(NTU)を見学した。

NTUは33,000人の学部生と大学院生を抱え、QS世界大学ランキングで11位、シンガポールにある世界トップクラスの大学であるとのことだった。

大学に着いてから、最初に自由時間があった。その時、この大学には様々な国の人が所属していることをすぐに実感でき、龍谷大学との違いを感じた。本学にも留学生はいるが、数はそこまで多くはない。しかしシンガポールは多民族国家であることもあり、多くの国の人がともに勉学しているのだろう。このことは社会に出てからメリットになると感じた。その理由は、グローバル化が進む今日では、他の国の人とコミュニケーションをとることが必要になってくるからである。しかし国によって価値観が異なり、違う国や民族、文化の人とは、同じ国の人とコミュニケーションをとるより難しいと考えられる。そのため学生時代に様々な国の人の人とコミュニケーションをとることは大きなメリットであり、他の国の価値観を知ることは、その後に非常に有利になるのではないかと考えた。

自由行動の後、ラボ見学を行えた。見学できたのはロボットを研究しているラボであった。私が印象に残ったロボットが2つある。1つ目は、家具を組み立てるロボットである。このロボットはイケアの椅子を組み立てるために開発しているとのことであった。2本のロボットアームで部品をつかみ、ねじなどを用いて正確に椅子を作り上げていた。人間が組み立てるより時間はかかるが、複数のパーツからで

きている椅子を、ロボットが独自に判断して2本のロボットアームを器用に使って組み立てていることに驚いた。

2つ目は、大型の構造物をつくるロボットである。このロボットも2本のアームを持ち、アームを移動させてコンクリートを何層にも重ねてモノをつくっていた。3Dプリンターという、精密にモノをつくることができるが、ある一定の箱の中だけの作業に限られ、あまり大きなモノはつくることができないというイメージを持っていた。しかしこのロボットはアームを用いて空間を自由に動けるため、比較的大きなモノもつくることが可能であった。また何層にもコンクリートを重ねるため少しのズレも許されないが、規模が大きくなっても正確性が劣らないとのことで、技術の高さを感じた。

3.2 加藤さんの講演

「若者よ、アジアのウミガメとなれ」の著者である加藤順彦さんの講演を拝聴できた。この講演で私が一番印象に残った言葉が「環境が人間をつくる」だった。意識を高く持ち、一生懸命にやることは、新しいことや面白いものを見つけるために重要なことである。しかし周りの環境が自分のやりたいことを認めてくれる所ではなく、周りとは違うために自分がやりたいことを諦めてしまったとしたら、その環境の中の「普通」に足を引っ張られたことになる。逆に（良い意味で）異常な環境に育った人間にとっては、異常な環境であってもその人にとっては異常ではなく、「普通」である。このように、人間は自分の周りの環境にとっての「普通」が自分にとっての「普通」になっていく。自分のモチベーションを上げてくれるような環境、すなわち周りの人々のモチベーションが高い環境にいれるかどうかは今後に関わってくると加藤さんはおっしゃっていた。私も無意識のうちに自分の考え方が周りに影響され

ていることがあると感じたので、どの環境に所属するかは自分を形成する上でとても重要だと考えた。

また商売をする上で、これからの日本についてのお話もされていた。日本は少子高齢化が進んでいるため、これからの消費者は高齢者が中心になってくる。高齢者は、新しいものを買って失敗したくないという心理から、普段買っているものを選ぶ傾向が強いのだという。そのため今トップの企業を新しい企業が追い抜くことはとても難しいとおっしゃっていた。一方でASEAN地域は平均年齢が低く、新しいものを買うことに抵抗がない人が多いため新しい企業が参入しやすい。日本では売るのが難しくても、他の国では売ることができる商品はたくさんあると感じ、世界に目を向けることの大切さに気がついた。

4. おわりに

このプログラムは、上で紹介しなかったが、現地の大学生とPBLを行ったり、他にも現地で活躍されている方のお話を聞いたりする機会があり、今までではできなかった経験を多くすることができた。その中で、ベトナムとシンガポールの文化に触れ、日本との違いを知り、世界に目を向ける大切さや世界の面白さを感じた。

また、英語力、積極性、物事を柔軟に考える力などにおいて自分の未熟さを改めて知る良い機会になった。特に英語力は、現地の大学生とのPBLで自分が伝えたいことがなかなか伝わらない歯がゆさを経験した。英語は様々な国の人とコミュニケーションをとるために重要なツールであるので、これからの学習により力を入れていきたい。

今回のプログラムで得たものを無駄にせず、今後の自分に生かしていけるように、これからの大学生活を過ごしていきたい。